

一ッ瀬川物語

1 はじめに

一ッ瀬川は、熊本県との境界をなす市房山（1721.8m）周辺の山地を源流域として東流していきます。急峻なV字谷をなす上流部では板谷川、小川川、銀鏡川、尾八重川などの支川が合流し、杉安峡を抜けた西都市杉安から河口までの下流部では、宮崎平野（別名：日向海岸平野）が広がり、三財川、鬼付女川などの支川が合流して日向灘に流れ込みます。全延長 91.3km（県内第 4 位）、流域面積 852km²（県内第 5 位）、3 次支川まで含める支川は 59 本（県内第 3 位）を有する県内でも有数の二級河川です。

これから始まる一ッ瀬川物語は、一ッ瀬川上流の山間部から、杉安峡より下流の平野部を経て、河口部に至るまでの一ッ瀬川及び支川とその流域に関する、江戸時代や明治期から今日までの情報及び変遷を、物語としてまとめたものです。

2 山間部

一ッ瀬川は、全延長の約 8 割を占める山間部では、椎葉村、西米良村、旧東米良村（現西都市）を流れます。この地域は高所にあるため¹⁻¹気候が厳しく、¹⁻¹地形が急峻で平地が少ないため、²⁻⁴住居は山腹から川沿いまでの範囲に工夫して建てられています。現在ではあまり見ることはできませんが、これらの住居は¹⁻⁴藁葺き屋根をしており、のどかな山村風景を醸し出していました。しかし、こののどかな風景とは相対して、生活は大変厳しいものでした。わずかな平地では農作物の収穫量が少なく、食料の確保が困難であったため、²⁻²焼畑により山を切り拓き、ヒエやアワなどの雑穀、糸巻き大根などを収穫していました。山では山菜、キノコ採り、イノシシなどの狩猟を行うとともに、樹木の管理・伐採により²⁻²林業や²⁻²製炭業などを行っていました。今日、住民が山を所有・管理してきた背景には、米良の領主であった²⁻⁶菊池家（米良家）が明治 4 年（1871）の藩廢置県の際に家臣（住民）に領地を分け与えたことによります。領地を分配された住民は、今でも菊池家への感謝と愛着を持って、「殿様」「閣下」と呼んでいます。

山間部で取れたの農作物や木炭などは、下流部や球磨地方に運ばれました。この時に利用したのが²⁻³米良街道でした。この米良街道は、昔は交通の難所であり、特に下流部への道は険しかったことから、米良、椎葉ともに球磨地方が主な交流先でした。そのため、下流部からの近代的な文化・文明が移入されることが少なかったため、椎葉村、西米良村、旧東米良村などは、神楽や民謡など²⁻⁷独自の文化・風習・伝説がいまだに残る、伝承の里として知られています。

環境が厳しいながらも独自の文化・風習をもち、素朴な山村であった山間部にも、近代になると開発の波が押し寄せてきました。険しい谷地形が³⁻³電源開発の適地として高く評価されたのです。初期は小さな施設の建設でしたが、土木技術の進歩に伴い、「槇ノ口」、「村所」、「一ッ瀬」「杉安」などの³⁻³水力発電所のように大きな施設が作られるようになりました。なかでも一ッ瀬発電所は、昭和 38 年に完成した西日本一の規模を持つアーチ式ダム「³⁻³一ッ瀬ダム」からの落水を利用し、約 18 万 kwh（揚水式を除く貯水式では全国 9 位）を出力します。宮崎県が誇るこの一ッ瀬ダムも、建設に際しては痛みを伴いました。西米良村の 4 地区（越野尾、横野、小川、村所）、旧東米良村の 3 地区（中尾、八重、銀鏡）において、水没戸数 361 戸、坪数 5,675 坪（約 19,000m²）が⁴⁻⁴湖底に水没し、その他の施設などを含め大規模な移転が行われたのです。また、建設後には大雨や台風の後の濁りが長期化するため、水質、景観、動植物等への影響が懸念されました。そのため、関係機関で構成した委員会や協議会を設け、濁水に関する原因究明、保全対策等について調査・検討を進め、さまざまな取り組みを実施し、濁水の軽減を図っています。

一ッ瀬川物語

3 平野部

山間部の厳しい地形を勢いよく流れてきた一ッ瀬川は、最後の杉安峡を抜けると平野部に辿り着きます。平野部は、¹⁻¹気候が穏やかで地形の起伏が少ないため、西都市の中心街をはじめ、大小多数の集落、²⁻²農作物を育む広大な農地が流域に位置し、¹⁻⁴田園風景を醸し出しています。また、古くから日向街道や舟運などにより人の往来も多かったため、各地の文化・文明がもたらされ、江戸時代の佐土原藩のお膝元では新たな文化や²⁻⁷民芸が生まれてきました。

平野部には、山間部では見られなかった古墳群があり、その代表ともいえる²⁻⁴西都原古墳群には毎年多数の観光客が集まります。また、南方神社内のクスの巨木や、国分寺、長谷観音、²⁻⁶伊東マンショゆかりの²⁻⁴都於郡城跡等の名所が作り出す景観が、この地域の特徴の一つになっています。

また、人々の生活に目を向けると、主要な街道や人々の生活道路が川まで至り、対岸に渡河する必要がありました。その渡河する箇所を²⁻³渡しと呼び、舟、箆板、徒歩など様々な方法を用いていました。その²⁻³渡しに木橋などを架け、利便性の向上を図っていましたが、洪水のたびに流されるため、洪水などを受け流すことができる²⁻⁵潜水橋を架けるようになりました。²⁻⁵潜水橋は現在でも利用されており、当時の知恵を知ることができます。

¹⁻⁴杉安から下流の平野部は¹⁻¹沖積平野となっているため、ここからの一ッ瀬川は緩やかに流れていきます。しかし、山間部と異なり、洪水が起こるたびに河道が位置を変え、農作物が収穫できなくなるなどの被害を及ぼし、人々の生活に与える影響が大きかったことから、³⁻²治水事業による河川改修を行ってきました。一ッ瀬川における³⁻²治水事業の歴史は古く、江戸時代の佐土原藩時代にもその記録が残っています。

佐土原藩の職制の中で、治水関連を職務とする³⁻²井出方という役職がありました。³⁻²井出方には役人が4人、その附役が8人の計12人が所属する³⁻²佐土原藩最大の役所だったことから、いかに³⁻²治水事業を重要視していたかを窺い知ることができます。

では、なぜ治水事業を重要視していたのでしょうか。

平野部で収穫された²⁻²農作物や山間部から流されてきた²⁻²木材等は、小型の舟や筏で²⁻³福島港へと運ばれ、和船(千石船：昔の大型船)にて主に大阪に出荷していました。佐土原藩は各舟から関税を取り、貴重な収入源としていたため、²⁻³舟運を滞りなく行い、通過する舟数を増加させることは、収入の増加につながったのです。そのため、³⁻²井出方という役人が行っていた、浅い箇所の浚渫、船着場の護岸などの³⁻²治水事業は極めて重要だったのです。

近代になり、昭和7年(1932)から公共事業としての河川改修事業が開始されました。宮崎県は、一ッ瀬川を³⁻²県内で最初の河川改修事業の対象河川として着手しました。その後、戦争による中断を挟み、河川改修事業は続けられ、約半世紀を経た昭和58年度の高川樋門設置をもって、ほぼ完了しました。支川の三財川、三納川、山路川、八双田川、川原川でも、²⁻⁶黒木旧三納村長(砂防村長)などの働きかけもあり、¹⁻²捷水路や築堤護岸等が施工され、改修が完了しました。三財川については、河川改修だけでなく、ダムを含めた総合治水(³⁻²三財川総合開発事業)として改修しています。

³⁻²治水事業が積極的に行われた背景の一つとして、一ッ瀬川流域の平野部で豊富に収穫される農作物の存在がありますが、その豊富な農作物の生産の礎となったものに³⁻³利水事業があげられます。なかでも、²⁻⁶児玉久右衛門による²⁻⁵杉安井堰と元佐土原藩士で³⁻²井出方附役だった金丸惣八による²⁻⁵金丸堰及び松本覚兵衛による²⁻⁵伊倉用水路は、一ッ瀬川流域における³⁻³利水事業の代表格といえるでしょう。最終的に²⁻⁵杉安井堰による恩恵は田畑灌漑面積約600町、²⁻⁵金丸堰及び²⁻⁵伊倉用水路による恩恵は田畑灌漑面積約1000町となりました。

一ッ瀬川物語

4 河口部

平野部を緩やかに流れてきた一ッ瀬川は、最後は日向灘に流れ込みます。河口付近の左岸側には、宮崎県内では数少ない河口入江である¹⁻²富田入江が広がっています。入江は汽水域に位置し、陸域に近い浅瀬には藻場が分布し、¹⁻³魚介類が生息できる環境が整っているなど、生産性・多様性が高い貴重な存在です。入江付近の干潟では冬の¹⁻³渡り鳥の中継地として多種の鳥類が渡来します。入江付近には、多種多様な魚を求めて多くの釣り人が竿を並べて釣りを楽しみ、冬の渡り鳥を求めて多くのバードウォッチャーが観察・撮影のために集まります。また、昭和54年の国民体育大会の際に漕艇競技コースが整備され、現在も利用されています。

現在、河口部では左岸側の¹⁻²富田入江のみですが、昭和20年代までは右岸側に¹⁻²二ッ建入江が存在していました。二ッ建入江は干潮時には干潟になるため、引き潮時などに²⁻²様々な漁法を用いて豊富な魚介類をとり、陸域では²⁻²塩田を作って製塩を行っていました。しかし、昭和25年の堤防完成により二ッ建入江の入口は締め切られ、徐々にその水域は縮小されて、開田（塩田、農耕地）、養鰻場に代わっていきました。そして戸板引き、建て網などの²⁻²様々な漁法とともに完全にその姿を消しました。

5 おわりに

これまで、一ッ瀬川の上流にあたる山間部から下流の平野部、河口部まで見てきた物語も現段階では終わりに近づきました。

一ッ瀬川は、流域の人々と様々な形で関わり合い、恵みを与え、潤してきました。同時に洪水や氾濫により多くの被害を流域の人々に与え、困らせる存在でもありました。安全な生活を手に入れるため、河川環境を改変する治水事業を実施してきましたが、河道を固定する護岸はほとんど行わず、堤外地を広く取って氾濫原に余裕を持たせるなど、河川環境の改変を必要最小限に留めました。そのため、一ッ瀬川は大きな改変を行われることなく、自然な状態を維持している貴重な河川といえます。

この貴重な一ッ瀬川と、これからも姿・形、関わり合いを少しずつ変えながら、流域の人々の物語は続いていきます。

一ッ瀬川とともに生きていくかぎり・・・